

フィールドインターンシップ実施報告

2015年11月5日

デザイン学ユニット

特定准教授 村上陽平

1. 概要

フィールドインターンシップは、「現場の教育力」を活用する試みで、複数の専門領域に関わる国際的・社会的課題に対して、フィールドにおける問題解決を通じてリーダーシップを養成するものである。本科目での到達目標は、初めて状況を理解するフィールドにおいて、適切に状況を構造化し、解決可能な問題として定義するとともに、限られた時間内で現場のステークホルダーや異なる専門領域のメンバーと円滑にコミュニケーションを取り協力して実現可能な解決策を立案することである。

本科目は沖縄でのデザインスクール(修士1年次が中心)、香港でのデザインスクール(修士2年次が中心)を経て実施するもので、英語で他領域の専門家や現地のステークホルダーとコミュニケーションを図りながら問題解決を行う点で難度が格段に高い。

2. テーマ

インドネシアのギャニャール県には、2012年にUNESCOの世界文化遺産に登録された「トリ・ヒタ・カラナの哲学を表現したスバック・システム」に含まれるパクリサン川流域のスバック景観があり、最古の灌漑システムを含んだ棚田の景観が有名である。スバックとは、伝統的な水利組合であり、バリ・ヒンドゥー教の哲学「トリ・ヒタ・カラナ」と結びつき、スバックの行事や運営が行われている。このように地元住民の生活と密接な関わりを持つスバックが世界遺産に登録されたことで、水田が観光施設に変わり、環境や文化、生活の悪化が懸念されている。そこで、従来の枠組みを適応、強化し、文化財や景観を保護しつつ地元住民の **Quality of Life** を向上させるサステイナブル・ツーリズムをデザインすることが今回のインターンシップの課題である。

3. 実施方法

到達目標を達成するために定めたインターンシップの実施体制と実施プロセスを図1に示す。まず実施体制に関しては、学生同士で日本語のみのコミュニケーションとならないように、各学生をそれぞれ別のチームに配置した。さらに、強く各自の専門性を意識させるように学生とは異なる分野の社会人専門家(教員、行政担当者)も配置した。また、現

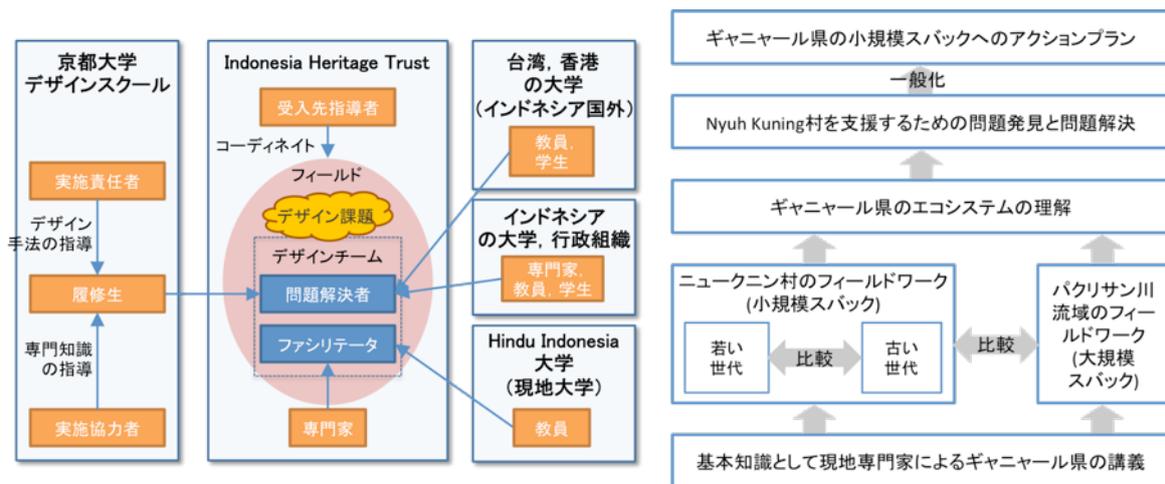


図1: 実施体制 (左) と実施プロセス (右)

地での活動が円滑に進むように受入組織と現地大学からファシリテータも加わり、各チーム4-5名で構成した。各チームには、世界遺産登録によって影響が予想される社会文化、経済、環境・インフラをサブテーマとして割り当て、各側面からサステイナブル・ツーリズムのデザインに取り組むよう設定した。一方、実施プロセスに関しては、スパックの規模と世代の2軸をとって、各比較対象でのフィールドワークを事前に調整した。比較により相対的な差を発見することで、現地の状況の構造化に繋げる狙いである。特にギャンヤール県には世界遺産に認定された大規模なスパックだけでなく、小規模のスパックも多く存在するため、それぞれ代表的なスパック（ニュークニン村とパクリサン川流域）をケースとして取り上げ、それらを比較することで、ギャンヤール県全体のエコシステムの理解を試みる。最後に、このエコシステムに基づいてニュークニン村の問題発見と解決を行い、それらを一般化することで多数存在する小規模スパックへの今後のアクションプランを提言する。

4. スケジュール

日時	場所	実施内容
7月8日(水)	KRP	オリエンテーション
7月16日(木)	ファブ	文献調査に基づく問題発見
7月23日(木)	ファブ	ステークホルダーの分析
8月3日(月)	Nyuh Kuning	現地専門家による講義 Nyuh Kuning 村長による紹介
8月4日(火)	Nyuh Kuning	フィールドワーク ワークショップ(問題発見)

8月5日(水)	Pakerisan	フィールドワーク
8月6日(木)	Nyuh Kuning	ワークショップ(問題解決, プレゼンテーション準備)
8月7日(金)	Nyuh Kuning	プレゼンテーション
8月31日(月)	KRP	最終発表会

5. 実施内容

【1日目】

日中：ギャニャール県庁にて県の基本知識を得るために、文化財、社会文化、スバックの灌漑システム、観光経済、開発政策のそれぞれの専門家(Udayana 大学)の講義を受ける。チームに分かれてニュークニン村のフィールドツアーを実施し、現在の村に対する気づきを収集する。

夜：ニュークニン村の村長やスバック長へのインタビューを実施し、ニュークニン村の年配の方の考える村の方向性などを探る。



専門家による講義



ニュークニン村のフィールドツアー



スバック長へのインタビュー



スバック長へのインタビュー

【2日目】

日中：チームごとにテーマを決めて、ニュークニン村でフィールド調査を行う。経済チームは、観光ビジネスのオーナーやハンドクラフトの職人に、環境・インフラチームは富裕層の住民と労働層の住民に、社会文化チームはホテル従業員や農家、住民にそれぞれインタビューを実施するとともに、土地の活用方法などの調査を行った。

夜：ニュークニン村のユースグループのメンバーにインタビューを実施し、将来のキャリアパスなどニュークニン村の将来に影響を与えうる要因の洗い出しを行った。



フィールドワークの実施

【3日目】

日中：パクリサン川流域のスバックを訪問するとともに、ギャニャール県の遺産保護オフィスの担当者や、スバック長、スバック寺院の僧侶など大規模スバックのステークホルダーにインタビューを実施した。

夜：インタビュー結果に基づいてパクリサン川流域とニュークニン村との違いを整理した。



パクリサン川流域のスバック長へのヒアリング

スバック寺院への訪問

【4日目】

日中：インタビューやフィールド調査の結果に基づいて得られた気づきをまとめて構造化して、潜在的な問題を特定した。また、その問題に対する解決策を考え、その一般化を試みた。

夜：プレゼン用のスライドを作成し、発表の準備を行った。



フィールドワークで収集した気づきの構造化と解決策の議論

【5日目】

日中：ギャニャール県庁で問題発見と問題解決についてプレゼンを実施し、各チームの提案を説明した。



発表会の様子

6. 参加者の感想

【藤田 (L3)】

活動内容は、大きく 3 セッションーフィールドワーク・グループディスカッション・発表ーであった。

フィールドワークについて。博物館への訪問は省略したほうが良かった。それで浮いた時間を Nyuh Kuning 村のフィールドワークに回したかった。その際、グループ内で、どこに行き何をするかについてのディスカッションを事前にもっとしておいた方が良かった。また、Nyuh Kuning 村と世界遺産地域では、置かれている状況や問題について乖離が大きかったため、問題を絞り込むことが難しかった。今回の場合であれば、どちらか一方に絞った方が良かったと感じた。

グループディスカッションについて。問題発見・解決手法の提案と発表資料の準備に費やせる時間が実質 1 日しかなく、これはせめて 2 日は欲しかった。時間にルーズだったため、もう少しメリハリを付けるよう働きかけた方が良かった。グループメンバーの母国語が異なる+英語ネイティブではないため、丁寧に互いの理解を確認し合えたことはとても良かった。

発表について、国際的なインターンシップなので、英語でのみ発表するべきであった。英語が分からない聴衆については、同時通訳もしくは提示されるプレゼン資料をインドネシア語にするなどして対応していれば、発表時間が制限時間以内におさまったと思う。最後に活動全体を通して、メンバー全員がとても良い人たちばかりで雰囲気が良く、また、拠点として使用した建物もとても素晴らしかったので、発表内容については少し思うところはあるが活動自体はとても楽しかった。

フィールドワークやグループディスカッションは、先方のスケジュールの組み立て方の関係上、本当に限られた時間しかなかったが、これまでにサマーデザインスクールや FBL/PBL, デザインスクール in 沖縄/香港にしっかりと取り組んできたことで、慌てず焦らず今回のワークショップに対応することができたと感じている。特に、デザインスクール in 香港にて英語でのワークショップを経験していたことは、今回のグループディスカッションの上で非常に役立った。逆に言えば、今回のように先方にスケジュールリングの主導権があり、こちらで活用できる時間がかなり限られているワークショップに参加するには、前述したワークショップは一通り経験しておく必要があると個人的には感じた。ワークシ

ワークショップに慣れている人であれば問題ないだろう。しかし、私のように、デザイン学に入るまでワークショップを全く経験したことがない人間にとっては、これまでに様々なスタイルで行われてきたワークショップでの経験を通じて、自分がその枠組みの中では何が出来るのか、自分の得意な役割は何か、また、どのように相手にアプローチすれば時間を有効に活用して問題解決の提案が出来るのか等を学んでおくことで、ようやく今回のワークショップを実りあるものに出来たと考える。

【市村 (L3)】

インターンシップということですが、FBL/PBL やサマーデザインスクールとやっていることは大差ないというのが正直な印象です。先日参加した、リーディングフォーラムで他大学のインターンシップの例(企業等と密に連携して、成果物が実際に製品化される、共同研究の成果が論文化される、など)と比べると、インターンシップ感が弱いと感じました。

一方で、デザインスクール in 沖縄では他大学の学生と日本語でのワークショップ、デザインスクール in 香港では向こうの学生とこちらの学生が同じ人数のなか英語でワークショップという形で段階的に経験を積んでいたため、今回グループの中に日本人は自分一人という状況でしたが、大きな不安なく活動に取り組みました。これら一連のプログラムによって、外部の人たちと連携して活動する自信を深めることができました。

特に、今回は国際経験という点で、大変勉強になり経験値を積むことができました。

日本でワークショップ等をやる時自分がよくとるスタイルとして、はじめのうちは自分の意見を強く主張せず、議論の流れを客観的に分析するようにしてから、足りない視点などを指摘するようなやり方が好きなのですが、今回もそれをやろうとするとあつという間に取り残されてしまいました。海外の人と議論する場合は、最初から思い切りよく自己主張していく必要があるということを実感できたのが今回の一番の収穫でした。

【古田 (L3)】

今回のインターンシップは、テーマ自体は自身の専門とは離れたものであったが、多くのことを学ぶことができた。その中で一番大きなものとしては、やはり、母国語が違う参加者とのコミュニケーションをとることの難しさであったと思う。

インドネシア語を母国語とする集団の中にマイノリティーとして議論や会話に参加することは非常に難しく感じた。細かい議論などを行う際に、メンバーの多くが母国語を使って

しまい、マイノリティーである私や香港のメンバーが参加できないことが何度かあった。このような状況を経験したことはほとんどなかったため、非常に良い体験をすることができた。今後、日本で国際的なワークショップを開催する時など、マジョリティーになった時に、注意すべきこととして、身を持って知ることができた。

本インターンシップを行う前に、沖縄、香港で行ったワークショップはとても良いステップアップになったと思う。沖縄で日本語を使って学生とワークショップを行い、ファシリテートの実践を経験し、その後香港にて、英語による学生同士のディスカッションなどを経験することができた。それらを踏まえて、英語を使って専門家と協働することができたため、比較的スムーズに議論などを行えたと思う。